

P1-22 日本行動分析学会 第31回年次大会
(2013年7月27日・28日 岐阜大学)

自閉症児はどのような時に「自発的に顔を見る」か？

When do children with ASD spontaneously look at the face?

○松田壮一郎・山本淳一

(慶應義塾大学社会学研究科/日本学術振興会) (慶應義塾大学文学部)

Soichiro Matsuda, Jun-ichi Yamamoto

(Keio University, the Japan Society for the Promotion of Science) (Keio University)

Key words: autism, spontaneous face-looking, smiling

問題と目的

これまで、自閉症スペクトラム障害児の社会的相互作用を改善させる試みとして、表情の模倣^[1]や、セラピストの言語行動に対する共感的応答^[2,3]、始発型共同注意場面での笑顔表出^[4]を標的行動とする介入研究が行われてきた。これらの介入研究では、明確な先行刺激に対する条件性反応として、社会的行動を定義し、訓練を行っている。

しかし、日常場面では、上記の介入研究における訓練場面のように、明確な先行刺激が存在することは少ない。その為、「見て」という言語指示が無い場合であっても「なんとなく顔に注意を向ける」ことが、他者の視線や、表情を弁別刺激とする学習に必要である。

そこで、本研究では「自発的に顔を見る行動」の成立条件について検討を行った。

方法

研究参加児: 本研究には、5歳5か月の広汎性発達障害男児1名が参加した。発達年齢の算出には、新版K式発達検査2001を用いた。総合発達年齢は4歳5か月だった。

セッティング: セッションは大学内の実験室で行った。10分を1セッションとし、およそ週に1日、1日平均2セッション (range: 1-4 sessions) 実施した。ベースライン期には5-6個のおもちゃを用い、介入期・プローブ期にはベースライン期と同一のおもちゃ5個を用いた。

手続き: 実験デザインにはA-B-Aデザインを用いた。

ベースライン評価 ベースラインのセッション中、参加児は実験者と自由に遊んだ。およそ一分に一度、実験者は参加児の名前を呼ぶか、「ねえねえ」と言いながら参加児への身体接触を行った。また、セッション中、実験者は参加児への働きかけやフィードバックを行った(例: 笑顔, 言語行動など)。

介入 介入期のセッション中、以下の手続きを挿入した。①**時間遅延**: 参加児が始発した言語行動や働きかけに対して、実験者がフィードバックするまでの時間を遅延させた。②**逆模倣**: 言語行動を含む、参加児の行動を、実験者が模倣した。③**身体接触**: 参加児の働きかけや、アイコンタクトに応じて、くすぐりを行った。④**「変な行動」**: セッション中に突然実験者が大声・奇声を上げる、ホワイトボードに頭を押し付ける、声色を変える、体をくねらせるなどの「変な行動」を、実験者が行った。

プローブ評価 ベースライン評価と同様だった。

従属変数: 10分のセッションを15秒間のインターバルにし、「顔を見る」、「笑う」、「顔を見ながら笑う」3つの行動について記録を行った。各セッションについて、各行動が生じたインターバルを、総インターバル数(40)で割り、百分率を算出したものを、従属変数として用いた。

結果と考察

ベースライン期、介入期、プローブ期における参加児の「顔を見る行動」・「笑う行動」・「顔を見ながら笑う行動」の生起率、及び「顔を見る行動」についてフェーズごとの平均生起率を図1に示した。

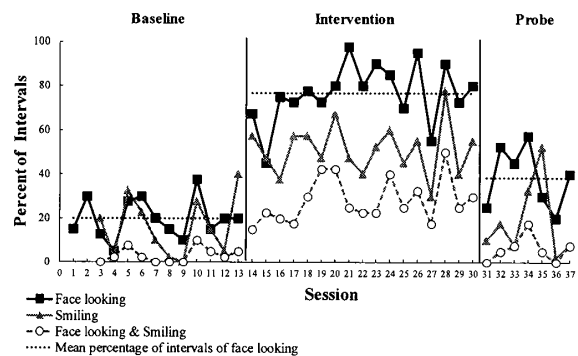


図1. 「顔を見る」「笑う」「顔を見ながら笑う」生起率の推移

ベースライン期 「顔を見る行動」の平均生起率は19.8 % ($SD = 9.2$) , 「笑う行動」は16.1 % ($SD = 13.5$) , 「顔を見ながら笑う行動」は3.2 % ($SD = 3.4$) だった。

介入期 「顔を見る行動」の平均生起率は76.8 % ($SD = 13.4$) , 「笑う行動」は51.5 % ($SD = 11.6$) , 「顔を見ながら笑う行動」は28.2 % ($SD = 10.1$) だった。

プローブ期 「顔を見る行動」の平均生起率は38.6 % ($SD = 14.1$) , 「笑う行動」は18.6 % ($SD = 17.9$) , 「顔を見ながら笑う行動」は6.1 % ($SD = 5.9$) だった。

結果は、本研究の介入パッケージにより、「顔を見る行動」の平均生起率がベースライン期に比べ、介入期で3倍以上、プローブ期で1.5倍以上増加することが示された。一方で、「笑う行動」「顔を見ながら笑う行動」は、介入期でそれぞれベースライン期の3倍以上、8倍以上の増加が認められたが、プローブ期では増加が認められなかった。

本研究により、「自発的に顔を見る」行動の成立における必要条件が明らかになった。今後は制御変数の同定を行い、必要十分条件を明らかにすることが求められる。

引用文献

- [1] J. A. DeQuinzo, D. B., Townsend, P. Sturme, C. L. Poulson, *J Appl Behav Anal*, **40**, 755 (2007).
- [2] A. Gena, P. J. Krantz, L. E. McClannahan, C. L. Poulson, *J Appl Behav Anal*, **29**, 291 (1996).
- [3] A. Gena, S. Couloura, E. Kymissis, *J Autism Dev Disord*, **35**, 545 (2005).
- [4] I. Krstovska-Guerrero, E. A. Jones, *Res Autism Spectr Disord*, **7**, 93 (2013).